2024年4月21日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

この兄弟のためにも

［コリントの信徒への手紙一8章1～13節］

「偶像に供えられた肉について言えば、「我々は皆、知識を持っている」ということは確かです。ただ、知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。自分は何か知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならぬことをまだ知らないのです。しかし、神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです。そこで、偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もいないことを、わたしたちは知っています。現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがいても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えられた肉だということが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。知識を持っているあなたが偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に供えられたものを食べるようにならないだろうか。そうなると、あなたの知識によって、弱い人が滅びてしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。それだから、食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません。」

[1]　キリストを信じる生活の中での葛藤

「コリントの信徒への手紙一」を読んでいます。今日は8章全体を読まて頂きました。このパウロの手による手紙は、極めて牧会的な手紙だと思います。つまり信仰共同体である「教会」の中で起こっていること、キリストを信じるようになった者たちが必ず考えることになる問題について見解を述べています。そしてこれを読んで感じることは、パウロは本当に、この相手であるコリントの教会の人々のことを祈りに覚えながら書いているに違いない、ということです。

　私たちクリスチャンは、皆どこかで、神様からの促しを受けて信じる決心をしたした訳ですね。初めは信仰を持つなんて思わなかった人も多い筈です。しかし、今ではイエス・キリストを自分の救い主として信じる信仰者として生きている。このクリスチャンがごくごく少ないこの日本の中でです。そうすると、必ずしも本質的なことではないのですが、いわゆる様々な日本的習慣やしきたり・文化との間でどう振舞って良いか悩むことも出てくる訳です。仏教的な葬儀や法事、神道的なお宮参り、初詣、または、会社の中の習慣や、プロのスポーツチームでも全員で必勝祈願やお祓いを受けることだってありますよね。公務員の人達は、ある意味国の職員ですから、国の方針と自分の信仰との間で悩みが出て来ることもあろうかと思います。つまり、クリスチャン以前には悩まなかったことが、他の神（偶像）を信じることはなくなったが故に、悩みとなることがどうしてもある。

　このコリントの教会のクリスチャンたちも、1世紀のクリスチャン（しかも異郷の地にある）であり、やはりその葛藤を持った人たちが多かったんですね。

[2] 知識は人を高ぶらせ、愛は造り上げる

ここで問われていることは、「偶像」とは何か、ということが一つのテーマとしてあると思いますし、それは後で触れたいと思いますが、パウロが最も心を痛め、心配したことは、教会内部でのおかしな「格差」が生じてしまうことです。「分派争い」ということがあったと申しましたが、ここでも見えない分派争いのようなことが言われていると思います。8:4に記されているように、「偶像に供えられた肉を食べること」についての意見の相違がありました。一方では、‟そんなことは偶像礼拝そのものではないのだから気にすることはないのだという人々がいた。8節で＜わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません＞ともあります。そしてそのように、このことに拘らない教会の人々の集まりと、それとは反対に、これは偶像礼拝につながるからそれを食べることを拒んでいる人たちが一方でいる訳です。そして、食べても良いと考える人たちが、食べない人たちのことをどこか見下しているということがあったようです。これはちょっと厄介ですね。何が厄介かとか言うと、‟俺たちは一歩先の「知識」を持っているが、まだあの連中は幼稚だ‟と、そういう内的な分裂や、裁く心が、交わりの中に浸透してきてしまっている、その空気です。私たちの教会はどうでしょうか？

　“信仰に生きる生き方“というのは、同じ主を信じていても皆違いますよね。そして、それで良いと思います。もちろん基本的な「信仰の告白」というものはお互いの共通項としてある訳ですが、その信仰を頂いてどう生きるのかというのは、その人と神様との問題であって、「絶対こうしなければいけない」という金科玉条のようなものはありません。一人ひとりが神様に祈りながら決断してゆけば良いのですね。「絶対にこうすべきだ」というのは、たとえそれが正しいことであっても、新しい律法を作ることになり、言っている本人が「自らを誇る」ことになってしまいます。その人が熱心ゆえに、確信が強いが故に、誇るということが起こりやすいですが、そこが大きなネックですね。教会の牧師・リーダーが心しなければいけないことです。

パウロはここで大事なことを語っていると思います。8:1を見てみましょう。「偶像に供えられた肉について言えば、「我々は皆、知識を持っている」ということは確かです。ただ、知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」。―これは本当にそうですよね。今例えばインターネットの世界の中で「高ぶり」というのが出やすくなってしまっていると思うのです。「そんなこと言うなんてお前はバカか」「笑笑」なんていう言葉がSNSなどでは無数に投書されます。顔が見えないから言いたい放題になるのかもしれませんが、そんなむき出しの高ぶりの言葉を書くなんて、その人の心が攻撃的なものに捕えられていて、逆に病んでいるものを感じることがあります。私たちの心は、放っておくとすぐ攻撃的になりやすいのです。パウロが言っていることはシンプルです。‟愛は、知識よりも大切だ”と言っています。愛とは、相手を知識でねじ伏せることではなく、相手に聴くことですね。相手との間に壁を作ることではなく、相手の気持ちに近づこうとすることです。

私たちはイエス様によって律法の縛りから解き放たれている、ということは本当です。ですから、使徒言行録でペトロが神様から「神がきよめたものをきよくないなどと言ってはならない」（使徒10:15）と戒められたように、食物そのものを、これは良い・これはダメと人間が決めつける必要はないのです。でも「食べなければあなたは信仰が弱い」などと言ってしまうと、言われた方は混乱してまた偶像礼拝に引き戻されてしまうことになりかねなません。11節の前半でこう言っています。―「そうなると、あなたの知識によって、弱い人が滅びてしまいます」。

「滅び」とは強い言葉なのでドキッとしますが、もし教会が、人間的な主義主張やもっともらしい正論でだけで成り立っていたら、そこには救いはないではないか、とパウロは言いたいのではないでしょうか。教会は独善的な集団になってしまう危険性があることを覚えていたいと思います。そこでパウロは、教会にとって決定的に大事な事を語ります。11節の後半です。―「その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです」。…教会のシンボルが十字架であるのは、このためですね！私たちは、神様が、御子イエスによって私たちすべての者の罪を贖って下さった十字架のもとに集められた兄弟・姉妹なのです！私たちは、あのイエス様の血汐によって、つまり、罪人のために命を投げ出す捨て身の愛によって一つとされているのです。一体、私たちに何ら誇るべきものがあるでしょうか？ありません！讃美歌にあるように、「キリストにはかえられません。何物も」です。本当に。だからパウロは、「食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません」(8:13)と言います。キリストに与えられている自由を敢えて制限するのです。交わりのために。

[3] 偶像って何だ

さて、「偶像礼拝」と言いますが、「偶像」とは何なのでしょうか。私たちは、主を知る前、知らされる前は、この世の神々と言われるものに寄り頼んでいたかも知れません。それは自分にとって「偶像」だったということを知らされますね。何でも偶像になるのです。自分の生き方もそれにこだわれば偶像です。自分が固く握り、手離せないものがあるでしょうか。お金、家、自分の趣味、名誉がある人は名誉、エトセトラ…。私は最近よく思います。なるべく身軽で召されてゆきたいなあと。イエス様だけいて下されば十分だと、モノを減らしながら、天国に行く予行練習をして行きたいと思います。そして一番捨てていく必要があるのはやはり「高ぶり」なんでしょうね。お互い、神様に全く赦され、救われている者たちとして、この私たちの交わりも、互いに祈り合いながら、さらに慰めと喜びに満ちたものとされてゆきたいと思います。「キリスト・イエスの心を心とせよ」とパウロは言いました（フィリピ2:5　文語）が、教会は、正に「キリストのからだ」であり、私たちは「神の畑」（3:9）です。御言葉の種を薪き続けましょう。そして聖霊にご支配頂いて、この畑を耕し続けて頂きましょう。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、この日もご一緒に礼拝を捧げられたことを感謝致します。あなたは唯一のまことの主です。あなたは「良い者にも悪い者にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」全く分け隔てのないお方です。大きな愛のお方です。私たちの方が人を受け入れられない狭い心を持っています。自己中心でしかありません。信仰を頂いていてもそうなのです。どうか、私たちの罪をお赦し下さい。私たちに教会を与えて下さっていることを感謝致します！今日も、十字架のもとに集められました。私たちが召されるまで、あと何回こうして礼拝を捧げられるでしょうか。あなたが許される限り、この与えられた主にある交わりの中であなたを讃えて生きることが出来ますように。どうぞ、お一人おひとりをなお聖霊によって強め、互いに愛し合って生きて行くことが出来ますように。また、私たちが共に生きる身近な者たちのためにも主が死んで下さったことを深く信じさせて下さり、高ぶりではなく、愛を注ぐことが出来ますように。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。